



演壇を離れ、一般読者席の前で話す海老原靖芳さん

笑いの原点「古里に」

佐世保フォーラム例会

放送作家、海老原靖芳さん講演

佐世保地区の経営者と西日本新聞社でつくる「佐世保フォーラム」の第37回例会が9月24日に佐世保市のセントラルホテル佐世保であり、市内在住の放送作家、海老原靖芳さんが「笑いの力」をテーマに講演した。数々のコント台本を手掛けてきた海老原さんは、笑いを交えて半生を振り返り「佐世保に原点があった」と述べた。

東京でテレビ番組「ドリ

フ大爆笑」や「コメディーお江戸でござる」のコントを手掛け、大阪で吉本新喜劇の脚本を書いた海老原さん。「東京に対するひいきや大阪に対する偏見がない。両方書けるのは佐世保出身だから」と自己分析した。

佐世保南高時代は、授業中にだじゃれを言ったり、ユニークなしぐさで笑わせたりする友人に恵まれた。2003年の佐世保市制1

00周年では「させほ版吉本新喜劇」の制作指揮を執り、100人の市民や市長を出演させて好評を得たことが「自分自身、とても面白かった」と回想した。

海老原さんは一流の落語家を招いた「佐世保かつちえて落語会」を主宰する。前座の子どもたちが、方言を交えた地元ネタで会場を沸かせる様子を再現し「笑いなら、一流と子どもたちが同じ土俵で勝負できる」と強調。「どんなジャンルでもオリジナリティーが必要。それが人を引きつけると思う」と語った。

佐世保のまちづくりにも触れ、中心部の国道に架かる歩道橋が「人の動線を切っている」と苦言を呈し、参加者の共感を得た。

本紙聞き書きシリーズで海老原さんが主人公の「悲しいから、笑ってきた。」を連載中で、会場には一般読者も多数詰め掛けた。

(宮崎省三)